男女格差の認知における社会的投射

田村美恵

(神戸市外国語大学外国語学部)

キーワード: 社会的投射、男女格差、合意性推定

Social projection in perceptions of the prevalence of gender gap

Mie TAMURA

(Kobe City University of Foreign Studies)

Key Words: social projection, gender gap, consensus estimates

近年、我が国においては、政治や経済のさまざまな場面で、女性の人材活用や活躍の推進が叫ばれているが、その一方で、依然として、賃金や人事面などでの男女格差については、改善の兆しが見られない (e.g., “World economic forum”, 2013)。その理由の一つに、固定的な性役割観の存在が指摘されている (e.g., 経済産業省, 2012)。性役割観に関する調査は繰り返されているが (e.g., 内閣府, 2011)、重要なのは、そうした性役割観が社会全体にどの程度流布、支持されているか (合意性) に関する個々人の意識のあり方ではないかと思われる。というのも、合意性がそれとして明示されることは希であり、通常は個々人の推測に頼るほかないからである。一般に、人は、ある事柄についての合意性を推測する際、「自己」の判断や態度などを集団全体に投射／一般化する傾向がある。従来、そうした投射は、外集団よりも内集団に対して顕著であるとされる (Robbins & Krueger, 2005) が、こうした投射傾向は、男女格差の認知に関しても見出されるだろうか。本研究では、内集団、外集団、並びに (社会) 全体に関する推定に「自己」がどのように投射されるのかについて検討し、男女格差の認知構造を探ることを目的とする。

方 法

調査参加者 公立大学の学生 252 名 (男 109 名、女 143 名)。手続き 授業時間の一部を利用し、以下のような内容を含む調査冊子を配布、回収した。

(1) **男女間格差に関する合意性推定** 男女の社会的地位や性役割の格差に関する項目を 14 個作成した。各項目について、男性集団、女性集団、(社会) 全体集団に関する合意性 (「賛成」と回答する人々の割合) を 0~100% で推定してもらった。

(2) **自己態度の測定** 上記項目に関する自分自身の回答を、「賛成」か「反対」の二者択一で選択してもらった。

結果と考察

14 の合意性推定項目のうち、参加者自身の「賛成」の割合が極端な値 (80% 以上) であった 2 項目を除外し、残り 12 項目について (全体集団に関する評定値に基づき) 主成分分析を行った結果、伝統主義的な性役割観 (伝統主義) と平等主義的な性役割観を反映する因子 (平等主義) が抽出された。両因子に負荷量の高い 2 項目を除き 10 項目を分析対象とした。

(1) 性役割観に基づく参加者の群分け

「伝統主義」に属する 6 項目と「平等主義」に属する 4 項目について、自己の回答が「賛成」であった場合に 1 点を与え、因子毎に各評定項目の合計点を算出した。この値について、全参加者の平均値を算出し、伝統主義得点が平均値以上で平等主義得点が平均値以下の者を「伝統派」、伝統主義得点が平均値以下で平等主義得点が平均値以上の者を「平等派」として各参加者を群分けした。

(2) 内集団、外集団、全体集団の推定における社会的投射

内集団、外集団、全体集団に関する合意性推定において、自己態度がどのように投射されるのかについて検討するため、参加者毎に、10 個の合意性推定項目それぞれに対する自己の

回答 (賛成または反対) と「賛成」に対する合意性推定値との点双列相関係数を算出し、「投射指数」とした。値が高いほど、投射が強いことを示す。

参加者の性別、性役割観、及び対象集団別に投射指数の平均を算出した (表 1)。これらを z 値変換し、性別×性役割観×対象集団の分散分析を行った結果、性役割観 ($F(1, 183)=4.38, p<.05$) と対象集団 ($F(2, 366)=26.55, p<.01$) の主効果、性別×対象集団 ($F(2, 366)=7.42, p<.01$)、性役割観×対象集団 ($F(2, 366)=18.51, p<.01$) の交互作用が有意であった。また、性別×性役割観×対象集団の 2 次の交互作用 ($F(2, 366)=14.79, p<.01$) が有意であったので、性別毎に下位検定を行った。

男性参加者について 性役割観×対象集団の単純交互作用は見出されなかった ($F(2, 366)=12, n.s.$)。性役割観、対象集団別に、各投射指数について、帰無仮説が $z'=0$ で両側検定を行った結果、すべての条件で、 z' 値が 0 と有意に異なっていた。これらのことは、男性参加者においては、自己 (の性役割観) は、伝統派であるか平等派であるかを問わず、内集団、外集団、全体集団に等しく投射されることを示している。

女性参加者について 性役割観×対象集団の単純交互作用が見出された ($F(2, 366)=30.22, p<.01$)。下位検定の結果、平等派では、対象集団の単純・単純主効果が得られた ($F(2, 366)=140.70, p<.01$)、多重比較の結果、投射指数は、内 (女性) 集団で最も高く、外 (男性) 集団で最も低く、全体集団ではこれらの中間であった。また、性役割観、対象集団別に各投射指数について帰無仮説が $z'=0$ で両側検定を行った結果、全ての条件で z' 値が 0 と有意に異なっていた。これらのことは、平等派では、自己 (の性役割観) は、内集団には正の方向で、外集団には負の方向で投射される一方、全体集団に対しては、それらを折半するかたちで投射されることを示している。

これに対して、伝統派では、対象集団の単純・単純主効果は得られなかった ($F(2, 366)=.63, n.s.$)。また、性役割観、対象集団別に、各投射指数について帰無仮説が $z'=0$ で両側検定を行った結果、全ての条件で、 z' 値が 0 と有意に異なっていた。これらのことは、伝統派では、自己 (の性役割観) は、内集団、外集団、全体集団に等しく投射されることを示している。女性集団内に一定数存在する「伝統派」のこうした認知傾向は、男性の伝統派とともに、男女格差を維持し、その解消を阻む一因になっている可能性があると思われる。

表 1 性別、性役割観、対象集団別の投射指数の平均値

		全体集団	男性集団	女性集団
男性	伝統派	.522	.388	.477
	平等派	.423	.284	.454
女性	伝統派	.506	.464	.458
	平等派	.397	-.205	.666